

## サポートブック

下野令子 河野俊寛 清水雅恵 酒井智美

### 1. はじめに

本校では数年前から、発達障害の児童生徒の指導に関して、AACの導入や環境の整備などを行っている。その中の一つの手段として「サポートブック」がある。サポートブックとは、第三者が障害のある子どもとかわるときに知っておくとよい情報をまとめたものであり、保護者が作成するのが主流である。今年度、本校では小学部及び中学部の保護者が作成教室を立ち上げてサポートブックを作ってきた。対して高等部では教師が主となって、サポートブックを作った。同じ学校内で保護者と教師が作るサポートブックの差異を考察できる機会と捉えて、研究を進めることにした。

### 2. 本校におけるサポートブック作成の経過

#### (1) 保護者が作成したサポートブック～小学部・中学部の実践～

##### ①形式

ポストカードホルダーをケースにし、用紙はハガキを使用する。

##### ②内容

富山大学教育学部の武蔵博文助教授自身がかかわったサポートブック作成教室で使用した「内容アンケート」を参考に、さらに項目を絞り込み、保護者同士で話し合いながら下書きを作っては修正を行っていった。また、サポートブック利用者のアンケートも検討して、情報の精選と場面によってページを入れ替えるダイジェスト版の作成にも取り組んだ。

主な項目としては「個人のプロフィール」「着替え」「食事」「トイレ」「好きな遊び」「コミュニケーション」「宿泊時」「知っておいて欲しいこと」「こだわりやくせ」「パニック時の対応と予防」「余暇活動」などがあり、保護者が子どもにあわせて必要な項目について、文章による記述でそれぞれに記入している。

##### ③記入について

本校の宿泊訓練施設「すずかけの家」を会場にして行われたサポートブック作成教室で、保護者がワープロ入力して作成した。ワープロ入力ができない人の場合は、できる人が代わりに行った。作成教室に参加してサポートブックを完成させたのは、小学部保護者12人（小学部全保護者の85.7%）、中学部保護者14人（中学部全保護者の77.8%）、全体では26人（小学部と中学部の全保護者の81.3%）であった。

##### ④サポートブック作成後のアンケートの結果

評価アンケートは、サポートブックが完成した直後にとった。各質問項目は5段階評価とした。アンケート回収率は61.5%であった。「楽しかった」「希望を満たすことができた」「使ってみようと思う」「思ったとおりにできた」の評価が高かった。（表1）

自由記述には以下のようなものがあつた。

- ・自分の子どものことを見つめ直し、どれだけ理解できているかを知るよい機会だった

- ・普段なかなか話す機会のないお母さんたちとお互いの子どもについて話すことができた・子どもを間に先生やお母さんたちと話し合うこともできて、親・先生とのコミュニケーションのきっかけになった
- ・個別に作成するのではなく集団で作ったため、励まし合い途中でめげずにできた
- ・親が知らなくて先生が知っていることも多々あるのではないかと思うので、先生目から見た意見をつけ加えてもらえると、より使い勝手のよいものになると思う

表1 サポートブック完成直後の母親の評価（5段階評価）

質 問 項 目	平 均
Q1) サポートブック作りは楽しかったですか？	4.9
Q2) サポートブック作りは難しかったですか？	3.8
Q3) サポートブック作りは希望を満たすことができましたか？	4.7
Q4) サポートブックを使ってみようと思いますか？	5.0
Q5) 思っていたとおりのサポートブックにできあがりましたか？	4.1
Q6) できあがったサポートブックはズバリ何点ですか？	78.3点

#### ⑤サポートブックの活用

保護者側では、夏期休業中のショートステイなどのサービスに子どもを預ける際に利用した。学校側では、本校で「介護等体験」、「教育実習」、「観察参加」を行った学生に使用した。それぞれ、サポートブックを使った後でアンケートをとった。

#### ⑥サポートブック利用者のアンケートの結果

アンケートは、夏期休業中のショートステイなどのサービスでのボランティアから25人、学生9人から回収した。各質問項目は5段階評価とした。「役に立った」「実態と一致していた」「わかりやすかった」「読みやすかった」「情報はちょうどよい」「子どもへの理解が深まった」「サポートブックは必要」の評価が高かった。(表2)

自由記述には、ボランティアから以下のような声があった。

- ・項目別に載せてあるので、初めての人にもわかりよい。特に大切なところに赤線が引いてあるのもよい。
- ・とても役に立った。サポートブックはとても大切なものであると思う。
- ・多少情報が多いように思った。本人を前にしてあわてて読む場合もあると思うので、要点がまとまっている方がよいのかもしれない。
- ・行き場所、接する人のことを想定して、中のカードを入れ替えたらどうか
- ・宿泊のショートステイなど情報がたくさん必要な時とそうでない時の2種類サポートブックがあってもよいのではないかなどがあった。同じく、学生からは、
- ・サポートブックを読んで、今までの行動が理解できたので、書かれていたことに気をつけながら接するようになった
- ・初めはコミュニケーションがどれくらいとれるかわからなかったけれど、サポートブックでコミュニケーションについて読んで、話しやすくなり、本人の意思を聞いたりできるようになった

表2 サポートブックを使用した支援者の評価（5段階評価）

質 問 項 目	平 均
Q1) サポートブックは役に立ちましたか？	4.3
Q2) どの項目・情報が役に立ちましたか？	省略
Q3) サポートブックの内容は子どもの実態と一致していましたか？	4.3
Q4) サポートブックの内容は具体的でわかりやすかったですか？	4.5
Q5) サポートブックは読みやすかったですか？	4.7
Q6) サポートブックの情報はどうですか？	4.3
Q7) サポートブックにより子どもへの理解が深まりましたか？	4.2
Q8) 子どもと関わる時に、サポートブックは必要だと思いますか？	4.8
Q9) サポートブックに載っていた情報以外で知りたかった情報は何か？	省略

## （2）教師が作成したサポートブック～高等部の実践～

### ①形 式

ポストカードホルダーをケースにし、はがき大の大きさの用紙を使う。用紙の1ページにつき1項目を入れることとし、場面によって項目を差し替えていくこととした。

### ②内 容

内容については、今まで高等部で検討してきた項目を「表紙」「個人ファイル」「日常生活の様子」「食事について」「コミュニケーション・認知」「余暇の過ごし方・好きな活動」「こだわりや癖」「パニックや困ったときの対処の仕方」「外出・買い物」「宿泊時の様子」「仕事について」の11にまとめた。さらに、武蔵助教授の資料から、基本の中の項目をより細かくしたり、基本に入らなかった項目をつけ加えたりして、生徒の必要に応じて補足できるようにした。

### ③記入について

基本の項目と、補足の項目から、教師が生徒に適したものや必要なものを選んで保護者に記入を依頼し、後日回収した。提出したのは高等部保護者24人(高等部全保護者の92.3%)であった。さらに、高等部の各学年の担当者が集まって、記入に不足があると思われた部分については、相談しながら加筆した。

### ④サポートブック作成後のアンケートの結果

評価アンケートは、サポートブックが完成した直後に保護者に記入してもらった。各質問項目は5段階評価とした。アンケート回収率は84.6%であった。「楽しいとも楽しくないともいえない」「難しかった」「希望を満たしたとも満たさなかったとも言えない」「使ってみようと少し思う」「思っていたとおりにできたともできなかったともいえない」と曖昧な、とまどったような回答が多かった。(表3)

自由記述には、

- ・項目によっては何を書くのかよくわからなかった
- ・書式があらかじめ決められているとよけい書くのは難しい。検討を要する。
- ・具体例も書いてあればもっと書きやすかった
- ・どう書いてよいのか分からないので書き方にすごく悩んだ
- ・思っていることを文字にできなかった。不満である。
- ・微妙なところがうまく表せず、とても難しかった。子どもにぴったりのいいものを作りたいと思ってやってみたが、うまく表せず、そのことに親としてショックを感じた。
- ・初めて接する人にサポートブックを渡して「よろしく」と言うには、この程度の記載では無理だと思う。書き出していくと辞書ぐらいのものが必要である。

- ・このサポートブックで初対面の人にどれだけ子どもの事を理解してもらえるか知りたい
  - ・発作時の対処の仕方についても記入しておく必要がある
  - ・家庭や学校の様子で記入したが、初めての人、場所では違う行動をとることも考えられる
  - ・書き漏らしていることがたくさんあるような気がする
- などがあった。

表3 サポートブック完成直後の母親の評価（5段階評価）

質 問 項 目	平 均
Q1) サポートブック作りは楽しかったですか？	3.0
Q2) サポートブック作りは難しかったですか？	4.0
Q3) サポートブック作りは希望を満たすことができましたか？	3.1
Q4) サポートブックを使ってみようと思いますか？	2.2
Q5) 思っていたとおりのサポートブックにできあがりましたか？	3.2
Q6) できあがったサポートブックはズバリ何点ですか？	45.4点

#### ⑤サポートブックの活用

10月に行われた2、3年生対象の産業現場等における実習（以下 現場実習と記述）の際に、教師が加筆した部分を保護者に目を通してもらった上で、実習先の指導員に渡して期間中利用してもらった。また、中学部と同様に「介護等体験」、「教育実習」、「観察参加」を行った学生に使用した。それぞれ、使用後にアンケートをとった。

#### ⑥サポートブック利用者のアンケートの結果

アンケートは、現場実習先の指導員から12人、学生10人から回収した。各質問項目は5段階評価とした。「役に立った」「実態と一致していた」「わかりやすかった」「読みやすかった」「情報はちょうどよい」「子どもへの理解が深まった」「サポートブックは必要」の評価が高かった。（表4）

現場実習先の指導員の自由記述には、以下のようなものがあった。

- ・文字について具体例があればよかった
- ・学校での様子（人とのかかわり方や作業や訓練など）の情報があるとよい
- ・女子生徒の場合、生理についての情報があるとよい
- ・得意なこと不得意なこと、好きなもの嫌いなものなどの情報があるとよい
- ・サポート時に意識して欲しいことの項目があるとよい
- ・平熱を書いておいてもらえると、検温が必要なとき役に立つ
- ・食品関係の作業に入れない場合もあるので、病気など記入してあればよい
- ・あまり項目が多岐にわたると見るのがおっくうになるので、これくらいが丁度よい
- ・施設での実習の際は一枚の紙にまとめてあったほうがよい
- ・じっくり読むなら多くの情報が必要なので適切な大きさだが、持ち歩くには大きすぎる
- ・色分けするともっと見やすい

同時に、学生の自由記述には以下のようなものがあった。

- ・サポートブックの必要有無は子どもによって違うと思う
- ・どんなかかわり方をすると落ち着くのか、喜ぶのか、の情報があるとよい
- ・障害に関して見られる症状、の情報があるとよい
- ・どんな性格か、他人とのかかわり方はどんな様子なのか、の情報があるとよい
- ・かかわる上でその子どものことを知らない相手に伝えるものだと思うので、情報として

- 具体的なエピソードを載せると、よりその子のイメージが捉えやすいかもしれない
- ・接していくなかで、とても役立つものだと思う
  - ・子どもを知っておきたいので、サポートブックはとても助かる。1度だけでは読み切れないし、覚えきれないのでいつでも読めるといい。

表4 サポートブックを使用した支援者の評価（5段階評価）

質 問 項 目	平 均
Q1) サポートブックは役に立ちましたか？	4.2
Q2) どの項目・情報が役に立ちましたか？	省略
Q3) サポートブックの内容は子どもの実態と一致していましたか？	4.0
Q4) サポートブックの内容は具体的でわかりやすかったですか？	4.3
Q5) サポートブックは読みやすかったですか？	4.5
Q6) サポートブックの情報はどうですか？	3.9
Q7) サポートブックにより子どもへの理解が深まりましたか？	3.6
Q8) 子どもと関わる時に、サポートブックは必要だと思いますか？	4.4
Q9) サポートブックに載っていた情報以外で知りたかった情報は何か？	省略

なお、アンケートの項目は、武蔵助教授が使用したのと同じ項目にした。富山での作成教室と本校のそれを比較検討するために、さきに小学部及び中学部が同様のアンケートを使用していたためである。小学部及び中学部との比較検討のため高等部でも同じアンケートを使用した。

### 3. 考察

#### (1) サポートブック作成後の保護者のアンケートの結果から

保護者のアンケート結果からは、ある程度予測をしていたとはいえ、小・中学部と高等部の間で大きな差が出た。自分たちで項目を考え、相談をし時間をかけて作り上げた小・中学部では、「難しい」と思いながらも、それを解決できる方法を自分たちで見つけ出すことができた。「集まって作ることで自分が楽しかった」という自由記述もあり、それらすべてのことが作り上げた後の満足感にもつながったのであろう。しかし、高等部では保護者が1人で、教師の用意した項目にそって書いているので、わからないところはそのままに書き進めることになり、「難しい」ままで終わってしまった。項目を手直しすることもままならず、不安感や不十分な思いが残ったようである。どちらの保護者も「難しい」と感じているが、ともに考え、問題を解決する人がいるかどうかでサポートブック作成に対する印象が大きく違っているものと思われる。教師が項目を作ったことよりも、保護者同士が集まったり、教師と相談したりする機会を得ずに記述したことが、このような結果をもたらしたのではないかと考える。

特に気になったのは「サポートブックを使ってみようと思いますか？」の項目で、小・中学部の保護者は5.0と全員が使いたいと考えているのに対して、高等部の保護者は2.2と使うことにためらいが見られることである。高等部では、サポートブックの仕上がりが遅れたこともあり、夏期休業中のショートステイなどには間に合わず、家庭から子どもが持参するという形では利用していない。実際の利用については2学期以降、学校から各実習で来校した大学生や、現場実習先の指導者に生徒理解の参考として使用してもらった。保護者が使用にためらいを覚えるならば、支援費制度などにもなうサービスを受ける時や、ボランティアと外出する時に、積極的な活用を望むことは難しくなる。

## (2) 利用者のアンケートの結果から

保護者のアンケートと比べて、利用者のアンケートの評価には大きな差は見られなかった。保護者が作ったものであっても、教師が項目を作ったものであっても、サポートブックによる情報提供は、利用者にとって有益なものとして受けとめられているようである。

自由記述から読みとる感想については、保護者が作ったものは総じて「よかった」「子どもの理解に役立った」といったサポートブックの本来の目的に添ったものや、「こうしたらもっとよくなる」といった提案であったのに比べて、教師が項目を作ったものは、「こんな情報も欲しい」と利用者にとって足りない情報を求めるものが多かった。アンケートの回答者もボランティアと施設指導員というふうには、立場が違うため一概には言えないが、保護者が作ったものは「この子にはこんな時このように接してください」と「思い」が書かれているのに対して、教師が項目を作ったものは「この子はこんな場面ではこのようになる」と「状況」が書かれていたためではないかと思われる。保護者の作ったサポートブックから読みとれる「思い」が、利用者を「指導者」ではなくて「支援者」としての視点に引き戻すのではないかと考える。

## (3) 高等部の調査から

保護者に記入を依頼したサポートブックを各学年の担当者が集まって読み合わせ、その内容を検討した。

まず、全ての生徒にサポートブックの必要性を感じなかった。自分の要求を言葉で述べることができ、特に「わからない」と言うことが伝えられる生徒（S-M 社会生活能力検査で小学校中～高学年程度）に関しては、サポートブックを作る必要がないように思われた。また、ADL が完全に自立しており、自閉性障害のない生徒に関しては、「パニックや困ったときの対処の仕方」「こだわりや癖」が必要ではない場合もあった。

反対に、補足が必要な場合もあった。てんかんなどの疾病をもつ生徒には「健康状態」の補足の項目を入れた。話すことでコミュニケーションがとれたり、話すことを楽しめる生徒には、「コミュニケーション」の補足の項目を入れた。

保護者の方がよく書けていた項目は「食事について」「宿泊時について」「余暇の過ごし方・好きな活動」などである。例えば、家では食べなくても給食の時には食べているので、教師が嫌いなものとして捉えていない食べ物があったりした。

教師の加筆は「仕事について」「コミュニケーション・認知」「パニックや困ったときの対処の仕方」の項目で要することが多かった。家庭の中では当たり前になっていて気にもとめない行動や、第三者には読みとれなくても親子の間では通じあう表現があるようで、記述によっては説明不足ではないかと思われる箇所もあった。また、家庭では、集団の中での子どもの様子（人間関係やコミュニケーション）や作業学習での様子は、参観や学校からの連絡帳などから大まかにつかめるものの、記述については難しいと推測できた。

## (4) サポートブックから

実際にサポートブックを読んでみると、小・中学部の保護者の作成したものは、子ども自身に焦点が当たっており、保護者の思いや願いが読みとれ、学校では見られないような余暇活動時や就寝時の様子がわかる。反面、集団の中での子どもの様子についての記述が少なく、支援者が注意を払うべき子どもの行動の記述が抜けているものもあるように思われた。また、どのような場面や人を対象として書いているのか判断のつかない項目もあった。

教師が項目を作成したものは、その子自身のことよりも、集団の中での様子や外出時や仕事の際の注意事項などに重点が置かれていて、場合によっては子どものマイナス面が強

調されすぎる傾向がある。支援者が目的のある活動を行う場合には、注意点がわかってよいこともあるが、支援者と子どもが楽しむために出かけるときに使用するには、その子の好きなことや話題などの記述が少ないように思われた。

#### 4. まとめ

平成15年度から、支援費制度が始まった。それに伴って各施設では、ガイドヘルパーなどの子どもと支援者が1対1で接するものや、ショートステイなどの集団に参加するものといった、いろいろなサービスを提供し始めている。1対1の支援に関しては保護者の方が得意であろうし、集団の活動に関しては教師の方が得意な分野で書きやすいだろう。アンケートや考察から、サポートブックの作成にあたっては、基本的には保護者が作成教室を立ち上げて集団で作成するが、必要に応じて教師とも話し合っただけで補足していく形が最も望ましいのではないかと思われる。

しかし、保護者が作成教室に参加することが難しかったり、場合によっては教師が項目をたてた方が利用者にとってわかりやすくなるものもある。教師が中心となってサポートブックの項目を作成する場合には、記述の際に保護者が教師と話し合える機会を作る必要があるだろう。この部分に関しては、来年度の高等部の課題としたい。

形式や内容については、携帯しやすいものにするとう情報量が少なくなる。反対に、いろいろな場面での情報を盛り込んだり、作成者が支援者に対してより深いかわりを求める場合には大きなサポートブックとなり、短時間では読みとりやすく携帯には不便になる。どこに行くのか（室内か・戸外か）、活動の時間はどのくらいなのか（短いのか・長いのか・食事をするのか・泊を伴うのか）、そして利用者によっても最もよい大きさや内容についての考え方は違ってくると思われる。ある程度内容を入れ替えることができる形式が、広く対応できると考えている。内容については、支援者からアンケートをとったり、子どもの受け渡しのときに話しあったりするなどして、少しずつ改善を心掛けていくのが望ましい。一人の人間をサポートブックで書き表すことは不可能ではあるが、使っている中で改善していくことでよりよいもの、わかりやすいものにできると考える。実際に小・中学部では、夏期休業中のショートステイなどのサービスで実際にボランティアからとったアンケートをもとに、使う場所や場面を考えた必要最小限の情報を入れたダイジェスト版を作成している。

いずれにしても、子どもたちには使えるサービスを利用して、いろいろな形で社会参加をして欲しいと願っている。その時に「行っておいで」と保護者が子どもの背中を押して「行ってきます」と本人が一步踏み出す手助けになるもの、支援者にとっては初対面の子どもに対してもある程度の対応が可能になるようなサポートブックを目指したい。

なお、サポートブックの作成及び研究を進めるにあたって、富山大学教育学部武蔵博文助教授のサポートブック作成教室の資料及びアンケートを使用させていただきました。ここに深く感謝いたします。

#### 参考文献

- ・ 鳴門教育大学附属養護学校研究紀要 2002年
- ・ 武蔵博文「障害児のためのサポートブック作成教室の試み」

日本特殊教育学会第41回大会発表論文集 2003年